

## 6. 鉋打の子どもたち

五十嵐 理 恵

- I. はじめに
- II. 小学生の人数の減少とその背景
- III. 小学校中心に行っている活動
- IV. 地区における小学生を対象とした活動
- V. 小学生の日常生活
- VI. おわりに

### I. は じ め に

私が鉋打地区を調査していて感じたことは、この地域の人々は、子どもたちに様々な自然体験・農業体験などを積極的にさせるようにしていて、そのためには出来る限りの協力をする姿勢が強いということであった。子どもに自然体験・農業体験をさせるという風潮は特に近年強まっているものであり、これには小・中学校で体験学習を重視し、積極的に行っていることも影響しているといえる。

「鉋打らしいもの」として、藤津比古神社の祭や五ヶ寺のお講と並んで、子どもに体験学習を積極的にさせていることを挙げる人も少なくなかった。山林・田畑が多いから、体験学習をしやすい環境であるということが大きな要因かと当初は推測した。しかし、都会に住み、自然に触れ合う機会がない子どもたちが体験学習するのは容易に理解できるが、なぜ、鉋打に住み、すぐ近くに自然があるという状況下で子どもたちにわざわざ体験学習をさせるのだろうかという疑問がわいた。例えば農業体験は、自分の家が兼業農家という子どもも多いはずなのに、小学校でも公民館でも行っている。地域の人々がそのために惜しみなく協力する背景や、体験学習の当事者となる小学生に対しても興味が出てきた。

ここでは、小学生を対象として行っている体験学習の他、小学校内・外での生活を取り上げ、鉋打地区における小学生の立場、地域の人々と小学生の関わり、学校・PTA・地域の関係、地域の人々が持つ小学生への意識を述べていきたいと思う。

### II. 小学生の人数の減少とその背景

鉋打地区には、1999年4月1日現在56名の小学生がおり、全員が中島町立鉋打小学校（以下鉋打小と略す）に通学している。基本的に1学年につき1学級で、1学級は約10人前後で構成

されている。しかし、1999年度は3・4年生が複式学級になっており、学級数は5である。

鉦打小校区の世帯数が359であるのに対し、小学生の子どもがいる世帯数は41であり、総世帯数の11.3%にあたる（1999年5月1日現在）。

表－1 鉦打小学校全校児童数の推移（2001年度以降は推定）

年 度	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
児童数	98	95	97	98	85	83	81	70	63	56	48	51	44	46	44	46

資料出所 鉦打小学校

小学生の数は減少傾向にあり、特に最近10年程の間に激減している。今から30年程前（現在の小学生の親が小学生だった頃）には、1学年に50～60名いたという。この減少傾向はさらに続くとみられており、2000年度には複式学級が増え（2・3年生、4・5年生）、新たに入学する1年生も3名、全校児童数は48名となり、2005年度には46名になると予想されている。児童数減少に伴い、小学校の統廃合の話も持ち上がっており、現段階では、中島町教育委員会は、数年後に中島町内の小学校（熊木小、豊川小、西岸小、笠師保小、鉦打小）の統廃合をすることを検討している。なお中学校レベルでは、統廃合が既に行われており、1947年に鉦打小と併設された鉦打中学校は、1964年に中島中学校へ統合された。<sup>1)</sup>

このように子どもの数が減少している背景には、全国的に見られる少子化と鉦打地区における過疎という2つの問題がある。少子化は、女性の社会進出や、子どもを産む・産まないの選択権が女性の自己決定権として認められてきていることなどを受けているものである。過疎は、若者が次々と進学先・就職先を求めて鉦打を離れ、金沢市や関東・関西大都市圏などに移住することなどが原因となっている。特に近年では、親も子どもが進学や就職のために家を出ることに寛容になっている傾向があり、若い世代の減少はさらに続くと見られている。過疎については別章で扱っているので、ここでは詳細を省く。

鉦打地区では小学生の人数が少ないため、子ども会活動（小学生を中心とした活動）は集落ごとではなく、鉦打小校下で行っている。集落ごとにとすると、1年生から6年生まで全学年が揃わず、構成人数も3～10名前後と少なくなりすぎてしまうからである。そのため集落ごとの子ども会という組織はない。河内では集落で子ども会活動にあたるものを活発に行っているが、その他の集落では寺でラジオ体操をする程度の活動で、大半の人は「集落ごとの子ども会はない」という意識を持っている。河内での活動では、10集落の中では比較的大きな集落であることと、活動の運営に力を入れている親が多いことが大きく関係していると考えられる。

### Ⅲ. 小学校中心に行っている活動

ここでは、「鉦打小らしい活動・行事」として人々が挙げたものを中心に述べていく。それらの活動・行事は、自然に触れたり、高齢者と子どもが交流することを重視しているという共通点がある。

#### 1. 花見給食

鉦打小学校の校庭を取り囲むように桜の木が植えられていて、4月中旬には見頃を迎える。鉦打小では、桜の見頃に合わせて花見給食を行っている。花見給食とは、小学生と地域の高齢者との交流を目的としたものであり、1991年<sup>2)</sup>から行っている学校行事である。

校庭の桜の木の下で、小学生と鶴亀クラブ<sup>3)</sup>（老人会）の人々が10のグループに分かれて学校側で用意した花見弁当を食べ、じゃんけんゲームやビンゴゲームをしたり、サルビアの苗を植えたりして交流を図っている。参加者は、鉦打小全校児童と、鶴亀クラブの人々が約80名前後、その他教職員も入れると総勢140名近くになる。小学校から鶴亀クラブに招待状を出し、出席できる人に来てもらうという形をとっているので、鶴亀クラブは100人以上の人が加入しているが全員参加というわけではない。しかし毎年、小学生よりも鶴亀クラブの人々の方が多いという状態になっている。

この行事を通じて、子どもたちは自然の美しさを堪能し、緑化作業を行うと同時に、高齢者との交流を深めることができる。鉦打地区の世帯の約3割が3世代構成であり、それらの家庭では小学生とその祖父母が共に生活をしているが、核家族の家庭に育つ子どもたちには高齢者との接触の機会が少ない。そのために、花見給食の時にも、高齢者に話しかけることができなかったり、はずかしがったりする子もいる。それを緩和する手段として、ゲームを取り入れるなどして学校側も工夫している。子どもたちだけでなく、高齢者にとっても子どもたちと接触する良い機会となっている。特に、夫婦のみ、または1人暮らしの高齢者にとっては、小学生の子どもと接触する機会がほとんどないので、花見給食は、世代を越えた交流の場として貴重なものとなっている。学校の教職員や花見給食に参加しない地域の人々が「鉦打では子どもとお年寄りの連携が強い」と認識しているのも、この行事の影響であろう。

#### 2. 収穫祭

これは1999年に初めて行われた行事で、体験学習の表現発表会という位置づけとなっている。鉦打小の児童は藤瀬ふるさと農園で、稲、大豆、小豆、胡麻などを栽培することを通して体験学習を行っている。この体験学習自体が、1999年度から農協とのタイアップで始められた。全学年で稲を栽培し、その他は、低学年は小豆、中学年は大豆…などというように学年ごとに栽培するものが異なっている。

稲づくりを例にとると、全校で5月に田植え、10月頃に稲刈りをし、その間は、5年生が成

長観察に訪れたり、6年生が他の田の稲との成長比較をしたりする。田植え・稲刈りの指導や日頃の田畑の手入れ等は、農協の職員が行っている。子どもたちは、田畑での農作業の他にも、高学年は脱穀をしたり、全校でわら細工づくりを体験したりもする。これらの体験の他に、農業をしている民家へ行って、米の選別、脱穀の方法、おいしいお米の作り方や昔の農作業の様子などを調査しており、その体験学習で得たものを発表する場として、11月6日に収穫祭を行った。

収穫祭は、鉦打小の体育館を使用して、午前の部と午後の部に分けて行われた。午前の部では体験学習発表ともちつき大会、午後の部では全校音楽、出店、ポン菓子づくり、縄ない、太鼓打ちの体験という流れになっている。体験学習発表では、田植えの場面や虫送りの様子、稲刈りの場面を再現したり、稲の成長観察記録を発表したりする。場面の再現は、学年毎あるいは全校で行い、そこで使用する農具などは農家から借りて用意している。その他にも昔のことは再現したり、衣装を揃えたりして、劇のような発表形式をとっている。もちつき大会は、従来PTAが中心となって12月下旬に行っていたものを繰り上げて行い、ここで児童と保護者らがついたもちは、児童が農園で栽培した小豆や大豆、胡麻で、あんこもち、きなこもち、ごまもちにして全員で食べた。午後は全校音楽の後、学年ごとの出店、PTAの人々のポン菓子づくりの見学、鶴亀クラブの人々との縄ない、祭の太鼓打ちを行った。特に子どもたちが自発的に取り組んだのが出店で、的当てゲームやアクセサリーづくり、パソコンを使って写真シールをつくるなど、学年ごとに様々に工夫した出店を開いていた。

収穫祭は、学校行事であるが教職員の指導や準備だけでなく、PTAも大きく貢献している。体験学習発表で使う石臼などの農具も保護者が探して用意している。保護者以外にも、農具を貸したり子どもたちの調査に協力する地域の人々、縄ないを教える鶴亀クラブ、太鼓の指導にあたる人など多くの地区住民の協力を得ている。そのせいか、収穫祭には、保護者や来賓だけでなく、小学生の子どもがいない世帯の人々も見に来ている。

収穫祭に関しては「来年もまたやるのかはわからないけれど、一応成功したんじゃないかな」(40歳代男性)という感想を得た。しかし一方で「大人がいろいろと応援しすぎて手をかけすぎるから子どもはたくましくない」(40歳代男性)という意見もある。成功したのは大人(親以外にも)が様々な形で準備・協力したからだという認識も多少あるようだ。

収穫祭は、1999年に始まった農業体験で得たものを発表する場として、毎年行う学芸会のような形で行われたものである。そのために劇のような場面再現を行ったり、全校音楽を演奏するという学芸会的な要素も含まれている。2000年度には、収穫祭を行わず、例年どおりに学芸会を開催する予定となっているが、「鉦打らしいもの」として地区の人々が挙げたということは、地区の人々も収穫祭を地域性の高いものとして認識していることを示しているといえる。

### 3. その他

鉦打小の児童は、鉦打緑の少年団の団員としても活動している。みどりの羽根募金活動の他に緑化作業、ヤマメの放流、巣箱づくり、野鳥観察などを行っている。緑の少年団の活動は、小学生の保護者らで構成される緑の少年団育成委員会によって運営されている。1999年には七鹿緑の少年団交流会が鉦打地区で行われ、藤瀬ふれあい農園でのそばまき体験、ヤマメつかみ体験、竹串づくり、焼き杉クラフト作りなどを通して、他の学校の児童・親子との交流を図った。ここでも自然体験を目的としており、子どもたちも充分に楽しんでいたようだが、竹串づくりを「子どもにやらせるとあぶない」という親もいたという。緑の少年団の活動に学校はあまり関与していない。活動の中心は児童と育成委員にあり、小学校の先生は交流会に顔を出したり、校長があいさつをする程度になっている。

もう1つ、「鉦打小といえば」ということで人々から挙げられたものが鉦打小学校自転車クラブである。これまでは5年生以上の参加となっていたが、1999年からは4年生以上の参加になり、活動も3月～7月であったものを年間を通じての活動に拡大した。自転車クラブへ入るか否かは子どもたちの任意で、近年では女子だけの参加になっている。自転車クラブは、交通ルールを遵守した自転車の運転を目指しており、夏季に行われる自転車競技の大会に出場し、過去8年間で6回全国優勝している。運営には鉦打小学校自転車クラブ運営委員会が当たっていて、これは小学校、PTA、クラブ員保護者、中島町交通防犯指導員から代表2名、中島町役場交通安全担当者1名の計9名から成っている。学科指導は小学校の先生、実技指導は交通防犯指導員が主に行っているが、その他の委員も指導の補佐を務める。自転車クラブが全国大会まで進み、優秀な成績を修めていることは、小学生やその保護者だけでなく、地域の住民も誇りに思っているようである。「鉦打の子どもは地味だけど我慢強くてしっかりしているから、地道な練習に向いている」と子どもたちの頑張りを認識する一方で、「子どもと学校と保護者と警察と行政の5つが連携して力を注いでいるから」とも言い（40歳代男性）、地域の人々の協力が他の地域よりも大きいということも強く認識しているようだ。

## IV. 地区における小学生を対象とした活動

### 1. 鉦打公民館のウィークエンド・コミュニティ・スクール

1994年度から、小学校が第2土曜日を休日としたのを受けて始められたものである。休日となった土曜日を子どもたちがどのように過ごすかを学校側も行政側も見ていきたいという思惑があった。活動の運営にあたるのは公民館の運営協議会である。構成委員は、集落の区長、鉦打地区の老人会長、壮年団長、婦人会長、鉦打小学校長、鉦打小PTA会長、緑の少年団育成委員長、鉦打公民館長、主事の他、鉦打の町議会議員や役場職員などである。運営協議会では

4月に公民館の事業内容・運営について審議し、ここでウィークエンド・コミュニティ・スクール（以下スクールと略す）の計画を立て、必要に応じてその都度、地区の人々の協力を得て活動にあたっている。

公民館は中島町役場の生涯学習課に属し、年代別に生きがいを与えるという目的を持って運営・活動を行っている。スクールや伝統伝承教室やその他の子ども向けのサークルは、小学生を対象とした、生きがいを与える活動といえる。

公民館でのスクールに子どもたちが参加することによって、休日をただ家の中で過ごすよりも外へ出て自然に触れたり、ものを作ったりして何らかの文化的活動をするという方向へ子どもたちを向かわせることができる。スクールは自由参加となっているが、鉾打地区の小学生の大半は参加しているため、学校・行政側の当初の目標は達成できたといえるだろう。

スクールでは自然散策、農業体験、料理教室、納涼祭で使う田楽づくりなどを行い、活動は多岐にわたっている。また親子での参加を呼びかけることも多く、世代間交流の促進もねらっている。スクールは、第4土曜日も学校が休みになってからは、第2・4土曜日に活動を行うことになった。自然散策では、公民館から藤瀬霊水公園までを歩いたり、農業体験では鉾打ふれあい農園（減田政策で休耕田となった土地を利用）にて白菜、キャベツ、キビを育てるなどしており、その他の室内での活動は公民館で行われている。これらの活動の準備等は、公民館運営協議会委員や地区の有志で結成されたボランティア・グループにより行われている。

1998年に行った農業体験では、白菜の苗を親子で植えて冬に収穫し、茶屋まつりに出品する予定であったが、長雨のために白菜の苗が腐ってしまうという出来事があった。この時、子どもたちは苗が腐ってしまったということを理解できず、来年になればまた芽が出ると思っていたという。こうした状況を大人は「土とのふれあいがなかったためだ」ととらえており、農業体験の重要性を改めて実感している。参加した子どもたちも泥だらけになりながらも苗を植え、普段土にふれていないだけに貴重な体験をしたといえるだろう。

スクールの他にも、土曜日の午後や日曜日を使って、祭の太鼓打ちを練習する伝統伝承教室や子ども茶道サークルなど、子ども向けのサークルを随時開いていて、こちらにも参加する子どもも少なくない。

スクールやその他の教室、サークルの講師となるのは地区の人々で、ボランティアでそれを引き受けている。活動内容により、鉾打地区でその道に長けている人に、公民館から講師の依頼をしている。講師となるのは、小学生の親に限らず、それ以上の年代の人や小学生との直接の関わりを持たない人の場合もある。講師を頼まれると多少忙しくても引き受けることがほとんどだという。そこには「地域の行事だから」、「子どもたちのため」、「自分の持っているものを教えたい」などの意識が見受けられる。

## 2. 祭への関わり

ここでは、藤津比古神社にて行われる夏の納涼祭と秋の新宮祭への関わりを述べていく。

納涼祭は8月15日に行われ、集落ごとにキリコを出す。キリコの担ぎ手は成人男性のみであるが、彼らが担ぐキリコを小さくして子どもたちが担げるくらいのものを作り、子どもキリコを出している集落もある。河内、西谷内、藤瀬では子どもキリコを出している。これらの集落は比較的集落規模が大きく、その分キリコの担ぎ手となる子どもの数も多いためだと思われる。子どもキリコを出さない集落の子どもたちや、夏休みを利用して鉦打に来ている親戚の子どもたちも集まり、祭を見物する。

しかし、子どもキリコの準備は大人が行い、子どもたちは祭の準備・後片付けには参加しない。子どもキリコを出すと言われるから祭に参加し、「祭は夜7時から」と言われれば7時ぴったりにしか来ない子どもがほとんどであるという。大人から見ると「今の子どもたちには祭を自分たちでつくっていくという意識がない」（40歳代男性）という印象を受けるようだ。しかし、子どもキリコをすっかりなくしてしまうと、ますます祭への意識が失われてしまうのではないかという不安から、子どもキリコを何とか出すように大人が努力している。

現在の親の世代が小学生の頃は、子どもたちが祭の日の朝からうろうろしたり、「邪魔だ！」と言われても手伝おうとした。祭が終わった後も大人と一緒に片付けもしていたのに比べると、今の子どもたちにはそのような自主性が見られない。1985年前後は、一時団塊の世代の子どもたちが多く、多少活発な印象もあったが、それ以降はまた消極的な子どもが大半になった。だが、逆に子どもキリコを出していたのに、キリコが祭の最中に壊れて子どもがけがをしようになったので、出さなくなったという例もあり、それについては「ちょっと過保護かも」（70歳代女性）という声もある。子どもが受け身になっているのは大人側の対応も多少影響しているのかもしれない。

実際、私自身も納涼祭を見学したが、子どもたちは藤津比古神社の前に並んだ出店でかき氷を買ったり、浴衣を着て友だちとはしゃいだりして祭の雰囲気を楽しんでいるように見えた。確かに、自分たちが祭をつくりあげるという意気込みをひしひしと感ずることはなく、キリコを担いでいる子どもたちも、少しおとなしいという印象を受けたが、祭が嫌だとまでは思っていないだろうと私には感じられた。

また、9月15日に行われる新宮祭には、子どもたちは特に参加しない。見物に来る子どももいるが、杵旗を担ぐなど祭の中心となるものには関わらない。小学校で新宮祭の様子を絵に描かせたりするので、本社が久麻加夫都阿良加志比古神社である別所の子どもたちも祭の見物に来るという。

子どもたちが関わるのは、翌日の神事相撲の時に開催される太鼓の競技会である。これは公民館での太鼓の練習の成果を発表する場でもある。参加する子どもは女子よりも男子の方が多

い。1985年頃までは男子しか太鼓を打つことができなかったということを反映しているのだろう。さらに昔は女・子どもは太鼓に触るものではないという考えが一般的だったので、それが子どもたちにもできるようになったのは、地区の人々の意識の変化や協力があったからこそである。ここにも、数少ない子どもたちのために何かしてやりたい、子どもに伝統を受け継がせたいという、大人から子どもへの思いが見受けられる。

## V. 小学生の日常生活

鉦打小校区は鉦打地区全域であり、かなりの広範囲である。鉦打小学校は西谷内にあるが、別所以外の集落に住む子どもたちは、全て徒歩で通学している。別所に住む子どもたちは親の出勤と一緒に家を出て車で小学校まで送ってもらい、帰りは中島町教育委員会が出しているバスに乗るか、徒歩で帰るかのどちらかになる。別所はふもとに近いところでも鉦打小まで約4.5 kmほどあり、徒歩だと約1時間かかる。

校区が広く在籍する人数も少ないため、仲の良い友達とも家が離れている場合が多く、放課後、友達の家へ遊びに行くのに親が車で送り迎えするケースもある。基本的に友達の家へ行く際には自転車を利用するが、鉦打地区内を自由に自転車で移動できるのは5・6年生になってからである。1・2年生は自分の住む集落内のみ、3・4年生は隣の集落までと学校の規則で決まっているので、近所の子ども同士やきょうだいで遊ぶことが多く、遠くに住む友達と遊ぶ時には学校帰りに友達の家に寄るか、家から親に送ってもらうようになる。

こういった交通の不便さ、子どもの数の少なさもあり、大勢で外を走り回って遊ぶというよりも、2～3人程度集まってテレビゲームをする方が一般的になっている。別所では、特に他の集落の友達の家まで距離があるためか、自分の家の田や近くの川できょうだいと一緒に遊んだりするときいたが、それ以外の集落では「今の子どもは外ではほとんど遊ばない」という声が多い。むしろ、金沢などに住んでいる子どもたちの方が、鉦打に遊びに来た時に、田んぼをのぞいてみたり、川で遊んだりすることが多いようだ。別所できいたケースは、地理的な問題の他に、親が仕事をしている間でも、とりあえず目の届く所に子どもを置いておきたいという親心も背景にある。これまで述べたように、子どもたちが外で遊ばなくなり、室内でテレビゲームをするという傾向は特に鉦打地区だけに見られるわけではないが、親や周りの大人は、せっかく身近に自然があるのに…と感じているようである。

また、兼業農家が多いこの地区で、子どもたちの農作業など家の仕事への取り組みの様子をきくと、必ずといっていいほど、「手伝いはしないねぇ」というような答えが返って来た。これはどの集落でも同じ状況のようだ。

その理由については「今の子は土に触れるのを嫌がるからね」（30歳代女性）という意見が



大半を占めた。先に述べた別所のケースでも「近くで遊んでても手伝いはしないんだけど」(30歳代女性)という話があったので、大人から見ると子どもたちは手伝いをあまりしてくれないという印象を受けるようだ。

しかし、「別に親もやらせようとしてないなあ」(40歳代男性)という声もあるので、子どもに手伝いをする気がないだけでなく、親も子どもに手伝いを頼まなかったり、手伝いをしないことを叱ったりしないことで、子どもが手伝いをする必要性に迫られないという状況も、その要因になっているのだろう。農家でも、その田畑の世話を第三者に委託している世帯もあるので、そういった世帯では子どもが仕事を手伝う必要性がますます低くなる。

このような状況の中で、敢えて子どもたちに農業体験をさせようとする動きが学校でも公民館(地区)でも起こっている。家の近くに田畑がありながらその田畑での作業については全くわからない鉋打の子どもたちに、農業体験を通じて家の人が行っている仕事を知ってもらい、知識の幅を広げてほしいという大人たちの願いがそこには込められている。

## VI. お わ り に

以上、鉋打における小学生の生活を見てきた。子どもの数が少なく自然の多い地区であることを反映し、何に関しても大人が子どもたちのために様々な準備をし、自然と触れ合う機会や世代間の交流を深める機会を設けようと努力している。このための準備や運営は全てボランティアで行われるという。それをきいて、それなりの報酬をもらえないことや、忙しいのに仕事を頼まれたりすることに不満を抱く人もいるのではないかと思ったが、そのことについて尋ねると「頼めば誰でもやってくれる」という声が多かった。小学生の保護者はもちろん、直接子どもたちと関わりのない人も協力的である。特に小学生の保護者は「家の仕事して、婦人会(壮年団)の仕事もして、学校行事やPTA行事にも出て…という生活をしてると、日曜日でも何かしら行事が入るから、1日ゆっくりできる日がほとんどない」(30歳代女性)という状況にありながらも、他の人も忙しいのに行事に参加していることや、子どもたちに様々な体験をさせたいという気持ちで活動に参加しているようだ。

子どもたちを対象とする活動への取り組みには、子どもたちへの愛情・熱意だけでなく、大人側がその活動に「鉋打らしいもの」、「鉋打にしかできないこと」という地域性を見出して、地域活性化につなげようとしている姿勢もうかがえた。高齢者との交流に力を入れているのも、この地区における過疎に伴う高齢化を逆手にとって、世代間の交流の促進という積極的な方向へ転換させている結果といえる。

これだけ子どもたちの面倒を見ようとする理由については「子どもが少なくなったから面倒見てるだけ」という意見が多かった。子どもたちに「鉋打らしい」体験をさせることで地区へ

の愛着を持たせ、鉾打地区への定着を図ろうとしているのかと予想したが、そこまでの意識を持っている人は少ないようだ。むしろ「いろんな経験をして心豊かでたくましい子に育てほしい」という思いの方が強く、鉾打に残るか残らないかは本人の意志に委ねている場合が多い。

大人から見た子どもたちは「おとなしくて地味で、自主性がないように見えることもあるが、我慢強く継続する子」と映っている。調査の際は、大人を対象に聞き取りを行ったので、ここでは大人から見た「子ども像」しか描くことができなかった。様々な体験を行っている当の子どもたちの感想や子どもたちから見た「大人像」などを聞き取れていないのが、今回の調査で不足した点である。

これからも、子どもの数が減少し、大人もさらに子どもたちの面倒を見ていこうとする動きを強めるだろう。人口が多いと個々の関係は希薄になるが、人口が減少してくるとその分個々の関係は世代を超えて緊密化する。

鉾打地区にもその傾向は、はっきりと現れている。子どもたちが成長し、後に「鉾打に育ってよかった」と振り返れるような活動をさらに行い、それを通じて地区の活性化がますます進むことを願う。

#### 注

- 1) 1961年3月に中島中学校へ統合となったが、鉾打教場としてしばらく残った。1964年4月に中島中学校新校舎が完成し、教場は廃止されて完全統合となった。
- 2) 1992年からという説もあった。
- 3) 老人会は65歳からの入会が基本となっているが、60歳頃から入会する人もいる。